

■ 北大武山を往復

寝床のコンクリートにデコボコがあり、快適とはいえなかったが、一夜が明けた。小屋にいた登山者のほとんどは、朝日を迎えるため夜明けを待たず出発(早い組は午前1時)して、人の気配が無くなった。寝床を譲ってくれた高雄のグループは、まだ寝ている。彼らは山小屋の夜を楽しんで、山頂へは行かず下山するという。そういうグループは、ほかにも居て台湾らしい登山形式だと思った。

山頂目指して8時出発。大部分の荷物は小屋に置いてきたので、足取りは軽い。三人分の寝袋を広げて寝床を確保してきたので、帰ってからの場所取りの煩わしさは無い。

しばらく行くと、早くも下山する親子連れに出会う。問いただすと息子の調子が悪く、引き返したとのこと。

小屋を出てから1時間、樹林帯の山道をなおも行くと、巨木「神木」に出会った。これは、地図にしるしてあるし、写真で見っていたので驚かなかったが、それでも一見の価値がある。看板の説明書きによると「台湾ベニヒノキ、樹



神木の台湾紅檜(ベニヒノキ)
3枚の写真を継ぎました。

齢約800～1000年、樹高25m…」台湾の巨木は日本統治時代になんり切り出してしまったので、残っているのは貴重だ。

山の上部では、夜中に雨が降ったらしく山道が濡れている。ひとつの涸れ沢の源頭にさしかかると、道端でお茶を沸かしているおじさんがいて、立ち話のあとお茶に呼ばれた。台湾の登山者はお茶沸かし用に小型のヤカンを持っている人が多い。一杯いただくと、ウーロン茶系の良い香りのお茶だった。茶会が終わると、お茶ガラは無造作に道端にうち捨てるので、これは何じゃと思ったが、台湾ではこうするらしい。まあ、葉っぱだから許されるのか。

姿がクロマツに似た台湾鉄杉の林と、細い

笹がかぶさる道を過ぎ、ちょっとした岩場を乗り越えると馬の背のような、主稜線に飛び出した。ここまで来ると、山の反対側つまり、太平洋側が見える。だがそちら側は雲海が広がるばかりだった。足元を見るとコケモモに似た赤い実を付けた植物があった。連れ合いがコケモモに違いないということで、熟したものをつまんで口に入れると、とても酸っぱい。レモンをかじった感じだ。

そこからは尾根伝いの緩やかな道となる。行く手をうかがうと上下する尾根が連なり、どれが山頂か分からない。1時間ほど緩やかな上り坂を行くと、ひょっこり、横木が一本欠損した鳥居が現れた。これは「高砂義勇隊」という、原住民で編成した部隊の働きを讃えた、顕彰・鎮魂碑である。祠の土台などの遺構があった。石碑には日本語で武勲を讃えた文字が刻まれ、「昭和十九年、高雄州知事、高原 逸人」の署名があった。このような高みに石材を運ぶのは大仕事であったろう。この場所の地図での表記は「大武祠」となっている。付近は、ほどよい休み場になっており、すでに登頂済みの登山者たちが遅めの朝食を摂っていたりしていた。

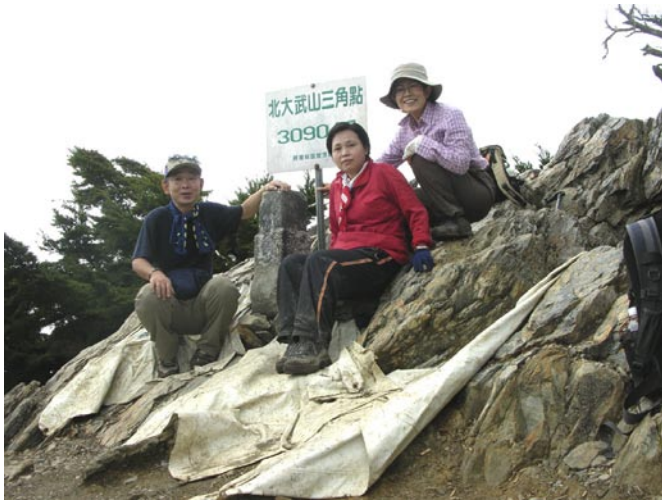
「大武祠」をあとに登り降りする尾根路を進み、次第に高さを得て、約1時間後の11時30分、やっと頂上に着いた。頂上からは北方の山々が青く霞んで聳立し、台湾の空を切り分けていた。

山頂の露出した岩に、「一等三角点」の石柱が据え付けてあった。台湾の測量事始めは日本軍が手がけ、一等三角点の石材は小豆島産花崗岩で統一したという。

他のパーティーはすでに帰った後で、山頂は我々だけだった。記念撮影後、持ってきた携帯食で昼食とする。私は小屋を出た後はTシャツ一枚で歩いたが、山頂で休憩するとさすがに寒く一枚着込んだ。昼食が終わった頃に後続のパーティーも到着して、山頂はにぎやかになった。北大武山往復の標準的な登山日程は、我々のような3日行程だ



高砂義勇隊の「大武祠」、鳥居の横木が欠損している。今はお休み処となっている



山頂にて。張さんはここに何度登ったか覚えていないと言った。



二晩目の宴会の様子。両手を挙げているのがリーダーの社長

が、小屋発で登頂し、登山口まで一気に降りる1泊2日や、健脚の日帰りも可能だ。登山者によって速さや、日程がまちまちなせいか、山頂には登山者の出入りが続く。

帰路は下りなので楽だ。のんびり歩き、15時30分に「檜谷山荘」へ帰り着いた。

■ 檜谷山荘で歓迎される

む。そして今日は土曜日、金曜の昨日に増して宿泊者が多だろうと少し憂鬱であった。ところが小屋に着いて覗くと、ゆうべの混雑から比べれば、ずっと人数は少ない。床に寝る人は無しだ。台湾登山事情の謎、金曜より土曜が空いている？ どうして？。

炊事場のベンチには、新たなパーティーが夕餉の支度中で、野菜を刻んだり、湯を沸かしたりのたけなわだった。私たちも、貧弱な夕食（日本から持参したレトルトカレー）を作るため、そこへ行くと、まあ、こちらへいらっしやいと、なんだか分からないうちに歓迎され、宴会の肴になってしまった。彼らは組織山岳会ではなく、社長がリーダーとなって取り仕切っている職場の登山同好会らしい。ここへ来た目的は今夜の宴会で、山頂には登らないという。

北大武山に日本人はほとんど来ないので、私と妻が日本



台湾鉄杉(*Tsuga chinensis*)学名からするとツガの種類らしい

人だと判ると、飲め、食べろと供給の嵐。彼らのモツ炒めなどが美味しいこともあって、ずいぶんとつまみ食いをした。このグループも料理班はオトコ衆であった。担ぎ上げた大きな鍋と豊富な食材を使い、料理に専念していた。女性たちは団らんの主役で、おしゃべりの花盛り。

食事になると、社長はほろ酔いのご機嫌顔でコーリャン酒の酒瓶を突きだし、妙なアクセントで「サケ、ケサ」と私に迫ってきた。こりやまずいと逃げ回れば、私の仕草がおかしいのか、とりまく台湾びとがケラケラと笑って喜んだ。

小屋の食事処は、小屋の軒下にあるテラスで摂る。テラスには透明樹脂の屋根がありその下に数組のテーブルとベンチが並べてあった。こうすれば雨が降っても濡れずに食事ができるし、昼間は明るい。機能的な作りで感心したが日本の山とは違い、大量の積雪が無いので(雪で潰れない)屋根付きテラスが取れるのだろう。夜のテラスでは何組ものグループが青い光の下で、それぞれ宴会を繰り広げていた。宴会は夜更けまで続いていたが、私と妻は適当なところで切り上げ、寝袋にもぐった。床の寝床は心地よく快眠の夜だった。張さんは、宴会の輪に加わって、彼女が寝に来たのは知らなかった。

夜が明けると、今日も晴れ。早立ちの人たちはすでに出発して、小屋はガランとしていた。宴会のみで下山する組は、まだ寝ている。張さんが持ってきた薬膳ラーメンで朝食。日本にはないタイプの味付けで、体によさそう。

7時30分出発。帰路はすべての装備を背負うので、再び大きなリックとなったが、「美麗宝島」の山に登った充足感で、疲れもなく10時前に登山口へ着いた。

ここで拙文のサブタイトル、「美麗宝島」について述べよう。台湾ふうには「美麗的寶島」というらしい。その昔ポルトガル人が台湾を海上から眺めたときに緑濃い島の美しさに感動し、「Ilha Formosa (美しき島)」と漏らした言葉といわれる。もちろん私が調べたのではなく孫引きだ。今では一般化して台湾の人も誇りを持って「美麗宝島」を使うようだ。観光パンフレットではよくお目にかかるし、「東京フォルモサ婦女会」という在日台湾女性の組織もある。

登山口から手配の四駆で高雄駅に戻り、台北行きの新幹線に乗った。私ら夫婦は友人を訪問するため台中で下車した。お世話になった張さんは台北に帰るので、台中駅でお別れとなった。次回は台中のことを少し紹介する。(続く)